Nakatombetsu town guide

中頓別町勢要覧

中頓別町民憲章

　私たちは、道北のきびしい自然環境の中にきたえられ強く生きぬく中頓別町民です。神秘的な鍾乳洞をもち、緑したたる山林と酪農郷建設のため、この憲章を定めました。

・私たちは、みんなで話し合い、教養と善意にみちた町にしましょう。
・私たちは、健康でよく働き、明るい町にしましょう。
・私たちは、みんなで決まりを守り、住みよい町にしましょう。
・私たちは、自然を愛し、文化をそだて、豊かな町にしましょう。
・私たちは、若者に希望を、おとしよりにやすらぎを与える町にしましょう。

発刊にあたって――1
地勢――2
位置と面積――3
中頓別の四季――4
中頓別の歴史――6
中頓別町総合計画――10
観光振興――14

発刊にあたって

中頓別町は、北海道北部に位置し頓別川上流域で山々に囲まれた盆地にあり、酪農を主な産業にしている人口 1,500 人余の小さな町です。

枝幸砂金が東洋のクロンダイクと呼ばれゴールドラッシュで賑わったのが 1890 年代、この地はまだ枝幸村の一部でした。瀬戸内海に浮かぶ大崎上島から砂金掘りで来ていた楢原民之助氏が、その賑わいが去った後もこの地に残り、農耕を始めたのが 1902 年のことでした。それから 7 年、中頓別の地区に部長設置（枝幸村第 10 部）が許可されることとなり、後に、この日が本町はじまりの日と定められることになりました。1916 年に枝幸村から頓別村が分村、1921 年さらにそこから中頓別村が分村して 2 級町村制が敷かれ、1949 年の 町制施行を経て今日に至っています。

原始のままの土地が開墾され、豊かに育っていた森から木材が切り出されるようになり、商工業も発展するなど大正期から戦中、戦後を経て高度成長期まで中頓別も繁栄の時代を迎えました。しかし、高度経済成長期以降は、産業やライフスタイルを含め社会構造の変化が急速に進み、この町は人口減少の時代へと進むことになります。官公庁の移転、企業の撤退、林業・林産業の衰退、農業も畑作から酪農への転換と大規模化で人口減少が続いていくことになりました。過疎対策、人口減少対策に取り組むことが町にとって最大の課題となり、さまざまな対策を講じつつも歯止めが利かないまま今日まで続いています。

それでも、中頓別は豊かな自然に囲まれた美しい町であることに変わりはありません。小さいなりにこの国の食料生産の一翼を担い、この町を愛する人々が心豊かな暮らしを営み続けています。この町を大切に未来につなぐ、このことが今を生きる私たちの大切な務めです。

中頓別町はいま、人生 100 年時代を迎えたなかで「小さな中頓別（まち）のしあわせをデザインする」をキャッチフレーズに、町民一人ひとりの参加と協働でまちづくりを進めていくことを基本に、働きたい、暮らしたいと思ってもらえるよう未来へと持続可能な町であるための挑戦を続けています。まちづくりには、この町で暮らす人々のしあわせを考え、その人の人生 100 年に寄り添い続けるという思いが大切だと考えています。

これからも、1 人ひとりがしあわせな暮らしを営み、それを豊かなコミュニティが支え合う共生社会を築いていきたいと思っています。皆様のご理解、ご協力をお願い申し上げます。

中頓別町長　小林　生吉

中頓別町の地勢

中頓別町は山々に囲まれた山岳部にあり、中央部には敏音知岳・松音知岳がそびえ、西部は天塩山地に連なる山々、東部はホロヌプリ岳に連なる北見山地の裾野に位置しています。これらの山々に水源を発する多くの支流を合わせて頓別川と兵知安川を形成。町の中央部を北流し、市街地南部で合流した後、頓別川としてオホーツク海にそそいでいます。この流域が平坦地および段丘地帯となり、酪農を主とする農業地帯および集落・市街地を形成しています。

中頓別町役場の位置と面積

東経 142° 17’ 12” 北緯 44° 58’ 11” 面積 398.51 ㎢

中頓別町は、北海道の最北に位置する宗谷総合振興局管内に属し、管内の東南部、北緯 45 度線上に位置しています。東は枝幸町、北は浜頓別町、西および西南方には、幌延町と音威子府村に接しています。

中頓の

Spring

Winter

中頓別の春は遅い。平野部から根雪が消えるのは4月の中旬である。乳牛たちが大地の恵みである青草を待ちかねる中、酪農家がトラクターで肥料をまき始める。

周囲の山々からの雪解け水が頓別川とペーチャン川を潤す頃、チシマザクラがつぼみを膨らませ、うぐいすやカッコウの鳴き声がこだまする。

鍾乳洞まつりが開催される6月初めには、シバザクラが薄紅色の絨毯のように咲き乱れ、悠々とした春の訪れを謳歌する。

やがて敏音知岳の峰に初雪が降り、早い冬の訪れを告げる。平野部での積雪は 11 月中旬で、12 月中旬には根雪が 10 ㎝を越え、やがて野山は深い雪に覆われる。

厳冬期の１月末、冬の大イベント「北緯 45 度しばれまつり」が開催される。ときには氷点下 30℃近い冬の夜、雪像が立ち並び、キャンドルの灯る中、打ち上げ花火などを楽しむ。

野山を埋める深い雪は、大地がしばれあがらないよう柔らかく包み、春の雪解け水は森を養う資源となる。

別
四季

Summer

6月中旬、敏音知岳では山開きが行われ、町内外から多くの人が集まり、夏の訪れを感じさせる。

7月になると、冬の寒さを忘れるほど暖かな日差しに恵まれ、各地でお祭りの音が響き渡る。

8月、夏の大イベント「北緯 45 度夏まつり」が開催されると日が暮れても賑わいは衰えず、打ち上げられる花火が夜空を染め上げ、夏の思い出を映し出す。

Autumn

8月の活気が収まる頃、牧草地では 2 番草の刈り取りが始まる。刈り取られた牧草はラップでロール巻きにされ、牧草地を彩るその光景は秋の風物詩といえる。

山岳部を含め、森林が豊富であることから木々の彩りは鮮やか。赤や黄色に色づいた紅葉に秋の深まりを感じる。

北海道大学附属図書館所蔵

ペーチャン砂金採取人（明治 30 年ごろ）

東洋のクロンダイクとして全国紙に報道されるほどで、日本一の塊金もここで採取されました。

1891 年（明治 24 年）～ 1913 年（大正 2 年）

砂金を求めて

枝幸地方が有望な砂金地であるという口伝えの伝説から、明治 31 年、堀川泰宗一行が、枝幸の沿岸から幌別川をさかのぼり、パンケナイに豊富な金田を発見しました。この時から、枝幸地方に砂金掘師達 300 人～ 400 人がパンケナイに入り、多くの収穫をあげました。

その後、砂金掘り師達は、沢を超えて、ウソタンナイ川、ペーチャン小川へ入り、砂金田が発見されたと言います。

ゴールドラッシュ

枝幸地方は、「東洋のクロンダイク」と呼ばれ、ゴールドラッシュを迎えました。この時期には、多くの砂金が産出され、明治 33 年 9 月、ウソタンナイ川支流からは、重さ 768g もの砂金が産出されたと言われています。

しかしながら、徐々に砂金の産出量が減少していき、明治 34 年には、産出量が皆無となり、ゴールドラッシュは、早くも終幕となりました。

頓別分村記念（旧役場前にて）

大正 10 年 3 月 31 日、頓別村から中頓別村へと分村し、中頓別村役場が設置されました。

1913 年（大正 2 年）～ 1924 年（大正 13 年）

開拓の始祖、楢原民之助

明治 37 年 3 月、大崎上島にある東野町の出身である、楢原民之助は、原始に森を分け入り、頓別原野に入植しました。入植地に仮小屋を建て、たった 1 人で未開の地である頓別原野を開拓し始めます。

民之助は、伐り拓いたわずかな畑にソバや馬鈴薯などをまき、翌年には、収穫に成功しました。この後、藤井、兵安、神崎、松音知、敏音知、小頓別地区などへ開拓者が、入植して来るのでした。

頓別村から中頓別村へ

明治42年4月1日、頓別村を含む枝幸村に町制が施行されました。当時、頓別村の人口は、1,091人でした。

大正2年、鉄道建設が本格化し、頓別村の人口は、2,894人と2倍以上となり、大正5年、枝幸村から頓別村へ分村することとなります。宗谷線の延長により、木材ブームとなり、人口も増加していきます。

大正10年4月1日、頓別村から中頓別村へ分村し、中頓別村が誕生します。

中頓別町の基幹産業（酪農業・林業）

古くから林業などで栄えた中頓別町に酪農業が根付いたのは、昭和初期でした。

1924年（大正13年）～ 1989年（平成元年）

林業と酪農業の発展

林業は、砂金に次ぐ古い産業です。大正から昭和にかけて全盛期を迎えました。

同時に昭和初期、冷害に強い馬鈴薯の作付けが増え、各地にでんぷん工場も建てられました。しかし、戦争による労働力不足などから、でんぷん工場は減少し、耕地も減反されると本格的に乳牛の飼育を中心とする酪農を始める農家が多くなりました。

昭和26年には、酪農経営の基礎ができ、林業と酪農の町として発展していきます。

中頓別町制施行

中頓別村市街地は、宗谷線沿線で最も活気があり、警察署や営林署など行政官庁をはじめ、商店、工場、金融機関なども整いました。

その後、全国的な不況と開拓地から伐採される木が減ったことなどで農業に転向する人も増え、純農村として歩み始めます。

戦後、昭和24年11月1日、中頓別村に待望の町制が施行され、中頓別町となります。当時の人口は、7,492人でした。

中頓別小学校運動会

今後、人口が減少することが予測されますが、子ども達は元気に中頓別町で育ちます。

1989 年 (平成元年) ～ 2023 年 (令和 5 年)

開拓 110 年、町制施行 70 年

令和元年11月1日、開拓から110年、中頓別町制が施行されて、70年を迎えました。同年11月4日には、中頓別町民センターで、姉妹都市である広島県大崎上島町の高田町長を招き、式典を開催しました。

式典では、酪農の町として発展してきた中頓別町産のなかとん牛乳で乾杯。

大崎上島町とは、楢原民之助の故郷であり、平成2年に、姉妹都市協定を結び、交流を図ってきています。

そして未来へ

令和4年4月1日、第8期中頓別町総合計画が策定、施行されました。

人口減少が進むこれからの時代にあたたかで、充実した暮らしのある町に向けて、縮充(しゅくじゅう)を目指すべき未来像に掲げました。

これにより、今後、10年の町の取り組みが始まるとともに、参加と協働により、町民1人ひとりが自分なりの生き方や幸せをデザインする町を目指し、豊かさや楽しさを生み出す町づくりを進めます。

中頓別町総合計画

～小さな中頓別（まち）のしあわせをデザインする～

私たちのまちのさまざまな所で、中頓別町の取り組みが行われています。中頓別町がどのようなまちを目指しているのか、そのために取り組みをどのように進めていくのかは、「総合計画」に基づいています。私たちの生活にとても身近である取り組みの中から、その一部をご紹介します。

中頓別町で生まれた主人公「かます」

方言で「かき混ぜる」を意味するその名前は、「牛乳をかき混ぜてうまみが凝縮したチーズを作るように今ある資源を凝縮させて豊かな人生を」という意味が込められています。

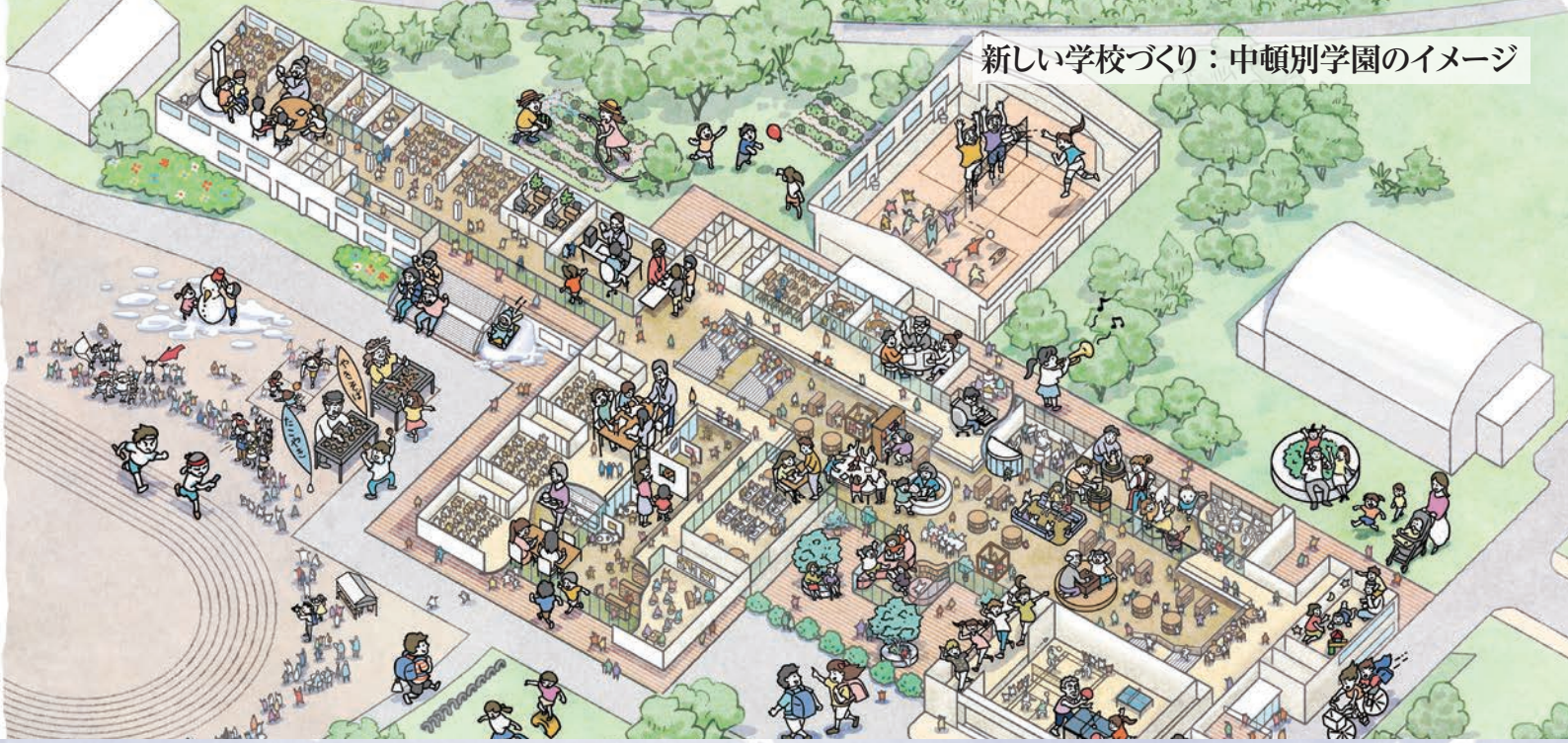
町民の皆さんからのご意見

町民の皆さんからヒアリングを通じて、様々な魅力や課題を発見しました。

人生の選択には、①進路選択、②定住の選択、③職業選択、④末永く暮らし続ける選択という4つの分岐点があり、中頓別町では、職業選択や住環境が限られることが原因で、若い世代が都市部へ流出してしまっています。さらに、将来の交通手段など高齢となっても地域で暮らし続けることに不安があることなどの課題もあることが分かりました。

これらを踏まえ、第8期中頓別町総合計画では、これからのデザインをするため、町民アイデアとして、「町営塾づくり」、「オンライン診療デビュー」、「育児と仕事の両立」、「エプロンツーリズム」、「なかシュラン」、「サバイバルの達人」、「いつできるの？“いつラボ”」とする7つのアクションが誕生し、これらの実現を目指して各種プログラムが展開されています。また、行政主導で実施する重点プロジェクトとして、「①新しい学校づくり」、「②くらしとしごと」、「③地域共生社会」、「④新たな交通体系構築とシェアリングエコノミー」、「⑤ゼロカーボン」、「⑥情報化」、「⑦地方創生の推進」、「⑧防災拠点の機能を有する多機能型コミュニティ施設」の8つのプロジェクトが位置付けられており、10年後の未来に向けて、町民の参加と協働により、豊かさや楽しさを生み出す「縮充(しゅくじゅう)」を目指すべき未来像として、取り組みを進めて行きます。

※　縮充とは、人口減少が進むこれからの時代の人々の参加と協働による、あたたかで充実した暮らしのあるまちに向けてつくられた言葉です。



新しい学校づくり：中頓別学園のイメージ

令和8年度に中頓別学園の開校を目指し、事業を展開し、小学校と中学校が一体化した、義務教育学校となります。

子どもだけではなく大人も学ぶことが出来る場として考え、図書室の併設などが構想されています。「まちの人とつくる学校」、「自然を活かし地域に学ぶ教育」、「グローバル化を見据えた英語教育の充実」を柱としており、令和3年度からワークショップを行い、人生100年時代を生きる上で大事にしたい力や町で出来たら良い学びのアイデアについて意見交換を重ねてきています。

新たな交通体系構築：ラッピングされたデマンドバス

旧天北線は、音威子府村から中頓別町、浜頓別町、猿払村を経て、稚内市に至るおよそ 149 ㎞の路線でした。国鉄民営化後、鉄道が廃止され、宗谷バス株式会社による路線バス「天北線」の運行が開始。その後、宗谷岬を経由する路線へ変更となり、路線名も「天北宗谷岬線」として、現在に至ります。令和 5 年 10 月から、新たな交通手段として、音威子府村から浜頓別町の区間は予約制のデマンドバスへ、高校生が浜頓別高等学校に通学するため、スクールバスの運行に移行となりました。デマンドバスのデザインは、地元の中学生、高校生から募集しました。

小さな中頓別（まち）のしあわせをデザインする

高齢者人口が近いうちに減少する方向に転じ、人口減少がさらに進む時代となり、ますます小さな町になってしまいます。それでも町民１人ひとりの参加と協働により、あたたかな、安心して、充実した暮らしのある、豊かさと楽しさを生みだすまちになることを目指すため、これを本計画のキャッチフレーズとします。

小さなまちのあたたかなつながり、安全安心な暮らし

豊かな自然と共存するまちには、仲の良い人間関係、安心な生活、災害の少ない安全な暮らしがあります。

参加や協働によって、豊かさと楽しさを生みだす縮充

「縮充（しゅくじゅう）」は人口減少が進むこれからの時代の人々の参加と協働による、あたたかで充実した暮らしのあるまちに向けて充てた言葉です。参加と協働により次の 10 年のまちづくりを進めます。

きく、はなす、まなぶ、やってみる

10 年後の未来に向けて、町民ひとりひとりが、お互いの声を聞き、対話を通して学び、様々なチャレンジをやってみることを大切にし、持続可能なまちづくりを目指します。

将来を生きる力を育むまち

遊びや生活の中で生きる力、探求心・好奇心を育む幼児教育の充実幼小中一貫とする隙間のない教育の機会を確保し、教育機関が連携できる環境を作ります。新しい学校づくりと運営体制を整えるため、学習機会を提供する土台づくりとなる施設整備をしっかり推進します。

子ども達が将来社会人になる時にこの町で暮らしたいと考えてもらえるよう、ふるさと教育の提供に努めるとともに、現在の児童生徒が卒業生と交流し、どんな社会人を目指せるのか考えられる機会の提供づくりを目指します。新しい学校づくりと連携して、どの年齢期においても生涯学習の機会をしっかり提供できる取り組みを目指します。

外国語の学力向上を目指すため、資格検定受検者をサポートし、外国文化との交流を推進するための機会提供に努め、他の自治体にはない教育環境を整えます。

全ての町民がいくつになっても学習をする機会を確保し、異世代交流などによる生涯学習を推進します。優れた芸術鑑賞の機会提供と文化団体・サークル活動の支援を図ります。町民のスポーツ振興に向けた設備環境を積極的に確保し、各年齢期が活躍できるようスポーツ団体の支援を図ります。また、各種教室や大会などイベント開催を連携して充実を図ります。

資源を承継し新しい仕事を生み出すまち

新規就農対策として、就農希望者の経営形態に親身な対応をすることに努めます。スマート農業の推進、酪農に携わる関係人口の確保により、農業者の労働負荷の軽減を図ります。なかとん牛乳の活用方法の拡大に向けた検討や醸造用ブドウの栽培の取り組みなどによる産業の複合化を目指します。

森林の保全と育成に努めるため、森林組合と連携し、森林整備を推進します。立木の有効活用の加速化、町内での地域材活用方法の検討及び公共施設への木材利用、木育活動を推進します。

既存事業所の事業維持に向けた支援継続、事業承継や新たな起業スタイルへの支援策について商工会や経済関係者と連携して取り組みます。また、地域内での起業機会を増やし、地域経済活動の活性化を推進します。

観光振興計画を軸に、地域資源の有効活用により観光事業を推進し、地域経済活動の活性化など人口減少問題の一助となるよう事業を推進していきます。農業体験交流施設「もうもう」を核に農協などと連携し「なかとん牛乳」を中心に、２次加工品の開発に取り組みます。

業務分解、短時間労働の提供、町職員の地域貢献ができる副業・兼業のモデル的推進により、中頓別町らしい働き方の実現を目指します。

SDGs と総合計画

日本語では、「持続可能な開発目標」と訳されます。2015 年の国連サミットにおいて、全ての加盟国が合意した「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」のなかで掲げられました。2030 年を達成年限とし、17 のゴールなどから構成されており、すべての国が取り組むべき普遍的な目標が掲げられています。

中頓別町がどのようなまちを目指しているのか、総合計画に基づいた取り組みをご紹介します。

誰もが健康で安心して暮らせるまち

安心して暮らすための地域医療提供体制と地域包括ケアシステムを整えます。健康診断や健康教室へ参加してもらえる仕組みづくりの工夫、病気の早期発見と治療につながるよう努めます。子育て世代包括支援センターを核に認定こども園と連携し、子育て支援メニューの充実、継続に努めます。

福祉施設を利用されている方も在宅で暮らしている方もサービスの充実を継続します。誰もが活躍でき、職場でも指導的地域にある人の性別に偏りがない社会づくりを目指します。

警察、地域生活安全協会などと連携し、防犯活動の徹底と犯罪の未然防止に努めます。快適な住環境が提供できるように住まい支援を行い、新築住宅建設を促進するため、新たな区画整備と提供を継続します。水道施設と下水道処理施設の効率的な維持管理を行うとともに設備更新を計画的に進めます。また、JRなどへの移動や高校通学バスなど地域交通資源を活用します。

防災計画、ハザードマップにより、災害に強いまちづくりの充実強化を進めます。要援護者の避難計画を確立するとともにマイタイムライン作成支援、防災訓練に福祉施設や企業などの参加を促進します。大規模な避難所の建設を検討します。火災、救急、救助体制を向上させます。

美しい自然を守り共生するまち

SDGs推進のため環境保全と連動し、施策体系に 17 の目標を達成するため、まち全体で自分達の日常にどのように関わるのか、しっかり考える機会を確保し、推進します。

豊かな自然環境となる森と川を大切に守り、町民が末長く誇りに思ってもらえるよう保全対策に取り組みます。

自然災害から町民の生命と財産をしっかり守るため、頓別川などの河川改修に努めます。野生生物の適正な管理に努めるため、有害鳥獣対策と特定外来生物の捕獲・防除を実施します。

豊かな自然環境を活かした環境学習や教育活動に取り組みます。

2050 年よりも早く脱炭素社会を目指し、バイオマスなど新たなエネルギーの活用、普及を行うとともに寒冷地域において、電気自動車の適切な運用が可能か検証を行います。

公共施設や民間の大規模施設における照明のLED化を促進します。

家庭から排出される廃棄物の減量化のため、分別収集の徹底と資源の再利用化となる取り組みに努めます。

町内全域の景観向上など素敵な空間づくりを目指します。

持続可能なまちづくり

第 8 期総合計画の推進管理と他の分野によらない地域振興を図り、この 10 年間の魅力発信を目指します。町民が中心になって取り組む社会づくりができることで、困った時の即時改善が行える自治体制の構築とこれを担う人材育成を支援します。

行政の人事管理の適正、これによる組織体制の効率化を図り、町民サービスの向上を促進し、人事評価及び業務マネジメントを適正に管理することで、職員の育成に努めます。また、デジタル・トランスフォーメーションの構築を早急に進めて行く必要があり、必要なシステムの改修や導入を検討していきます。テレワークを含む情報関連は、電子決裁や Wi-Fi を活用した業務執行などデジタル社会に向けた環境の構築を進めます。

将来的な財政見通しを持ちながら、行政サービスを低下させることなく、コスト削減など事務効率化に取り組み、収支均衡を図ります。

これまで事務・事業の広域連携を進めてきた取り組みは継続します。

正確な選挙事務の遂行、感染防止対策に考慮した投票所設営の検討します。監査事務に必要な資料の収集並びに伝票などによる事前調査をより迅速に行うよう努めます。

頓別川でのカヌー体験

砂金掘り体験

手つかずの「自然」が残るまち 遠くから 足を運ぶ 価値を生む

中頓別の観光振興
ATTRACTION OF NATURE
自然の魅力を大胆に

スノートレッキング

この町の観光資源は、なんと言っても恵まれた自然の数々。このまちで観光を進めるにあたり、自然の魅力を最大限に発揮することを基盤として取り組んでおります。

平成 27 年度から着手した観光振興計画の策定に基づいて、観光が地域経済の活力を取り戻す核となれるよう、農商工と連携し、観光受入体制の拡充を進めています。

観光施設について、ピンネシリ温泉といった観光関連施設の運営を一元的に運営し、中頓別の観光を包括して提供できるよう取り組んでいます。

中頓別鍾乳洞自然ふれあい公園

地球の鼓動が
地に道つくり
季節の息吹が
野に花咲かす

北海道天然記念物の「中頓別鍾乳洞」をはじめ、季節ごとの動植物と触れ合える自然豊かな公園。中頓別の自然をゆったりと楽しむことができます。

中頓別鍾乳洞は、およそ 1 万年前、北の海に生息していた貝類が堆積し、石灰岩を形成したもので、これは学術的にも貴重であり、日本最北のカルスト地形となっております。

1.国道275号線から眺めるピンネシリ岳。ヒグマ、エゾシカ、エゾリス、そしてここ数年で人気者の座を獲得した「シマエナガ」など多様な動物が棲む。「日本本土最北の登山道が整備された山」でもあり、毎年登山ファンが訪れる。2.中頓別鍾乳洞自然ふれあい公園の氷筍 3.大畑山からの中頓別中心市街地。かつて市街地と牧草地の間を天北鉄道が往来した。 4.冬のペーチャン川雪景。明治時代砂金掘りで賑わった。5.天北線「敏音知駅」跡 6.松音知付近天北線鉄橋跡(トレイルコース視察風景より)

すれ違えば「こんにちは」と小さな子どもから大人まで。都会からの移住者や近年受け入れ始めた「地域おこし協力隊」は皆驚くが1年と経てば自らも誰彼構わず挨拶を交わしている。中頓別をよく訪れるというある人は「天北線跡、貝化石鍾乳洞、ゲレンデ整備の技が光る寿スキー場、管理の行き届いた寿公園遊具、温かな人柄の町民」などに触れ「小さな輝きがいくつもある町」と呼んでくれる。

歴史、よどみなく

明治中後期の砂金ブームに沸くペーチャン川等で使われた砂金掘の道具「ユリイタ」。「一攫千金」も「天北線」も遠く過ぎ去った現代、この町の歴史文化は新たな観光資源へと緩やかに変化し、次世代によどみなく受け継がれていく。

約75年間音威子府から稚内までを繋ぎ、豊富な材木資源と人を運んだ天北線が国内造材事業の縮小や車社会への移行に伴い廃線となって久しい。車窓風景も鉄路から道路へと変化した。明治時代、大崎上島の漁師である楢原民之助が、続く不漁や沈没を機に砂金事務所を開きゴールドラッシュ後も1人残り開墾し始まったこの町は、文明の進歩と反比例するように過疎が進む。かつて一攫千金を運んだペーチャン川のように細くもよどみなく流れつづけていれば、いつかまた新たな夢が運ばれてくるだろうか。

町の木

アカエゾマツ

町の花

チシマザクラ

【企画・編集・発行】

中頓別町役場
政策経営課

北海道枝幸郡中頓別町字中頓別 172-6
TEL 01634-6-1111 / FAX 01634-6-1155
発行：令和 5 年 10 月

【協力】一般社団法人 なかとんべつ
観光まちづくりビューロー
【印刷】有限会社 天北印刷工業